

北海道価値創造パートナーシップ会議 in 稚内  
～新たな北海道総合開発計画に向けて～

日時 平成 27 年 5 月 28 日 (木) 14 : 00~16 : 00

場所 稚内商工会議所 産業交流センター 2 階 研修室

I 議 事

1. 開会
2. 出席者紹介
3. 国土交通省北海道局説明  
・新たな北海道総合開発計画に向けて
4. 出席者による意見発表  
【テーマ：『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けた環境整備、対流促進』(サブテーマ) 地域資源の活用・対流の促進】
  - ① ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介
  - ② 日頃の活動を踏まえてご意見
5. 意見交換
6. 閉会

II 出席者 (順不同・敬称略)

今日出人	国土交通省	北海道開発局	開発監理部	次長
小林 力	国土交通省	北海道開発局	開発監理部	開発計画課長
小松 正明	国土交通省	北海道開発局	稚内開発建設部長	
米田 義弘	国土交通省	北海道開発局	稚内開発建設部	次長

小池田 章	株式会社フレイン・エナジー	代表取締役
佐々木 政憲	稚内北星学園大学	学長
田中 美智子	株式会社丸夕田中青果	統括本部長・ 2011 年やん衆横丁 11 月の陣実行委員長
堂脇 聖美	餅 café&stay わが家	経営
西谷 榮治	前利尻町立博物館	学芸課長
吉川 勝	株式会社ホクユーストアー	代表取締役

### Ⅲ 議事

#### 1. 開会

小林：

ただ今から「北海道価値創造パートナーシップ会議 in 稚内～新たな北海道総合開発計画に向けて～」を始めさせていただきます。本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。会議の進行を担当いたします、北海道開発局の小林と申します。宜しくお願いたします。この会議につきましては北海道内各地域の課題解決や活性化に日頃からご活躍されている方々のご意見等を直接お伺いし、新たな北海道総合開発計画の立案に生かすとともに、関係者相互の協力関係の促進を図ることを目的として開催させていただきます。予めお断りさせていただきますが、東京の国土交通省北海道局の方からも担当者出席の予定でしたが、飛行機の大幅な遅延等に因りまして急遽欠席ということになりました。お詫び申し上げます。本日の会議はマスコミの方も含めまして一般の方々に傍聴いただいております。また本日の配布資料でございますが、資料 1 から 8 ということで用意させていただきます。不足等ありましたら事務局に言っていただければと思います。本日の議事録及び資料につきましては後日、国土交通省のホームページに掲載させていただきますのでご承知おきください。では初めに国土交通省を代表しまして今北海道開発局開発監理部次長からご挨拶を申し上げます。

今：

北海道開発局で計画の担当をしております今でございます。皆様には大変お忙しい中、お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。司会からもありましたけれども国土交通省の北海道局におきまして、次の北海道総合開発計画の策定の作業を進めているところでございます。来年の春の改定に向けまして動いておりまして、改定にあたりまして各地域の方々に活躍されている方々をお招きしてご意見を伺っていこうということで 3 月に太田国土交通大臣に来ていただきましてキックオフの会を札幌で開催いたしました。以降、苫小牧、岩見沢、網走、今日の稚内で 5 回目です。7 月に素案の作成を考えておりまして、最後の締めくくりの大事な会でございます。貴重なご意見を伺えればと思っております。今回のテーマでございますが、人が輝く地域社会におきまして世界水準の価値創造空間の形成に向けた環境整備、対流の促進ということでございまして、今日は特にサブテーマといたしまして、地域資源の活用、対流の促進ということになっております。皆さまから忌憚のないご意見をいただきまして意見交換をできることを楽しみにしておりますので、短い時間になりますけれども、本日はどうぞよろしくお願い致します。

## 2. 出席者紹介

小林：

報道関係者の方々をはじめ傍聴の皆さまのカメラの撮影はここまでとさせていただきます。続きまして出席者のご紹介申し上げます。小池田章様でございます。

小池田：

よろしく申し上げます。

小林：

佐々木政憲様でございます。

佐々木：

佐々木です。よろしく申し上げます。

小林：

田中美智子様でございます。

田中：

田中でございます。どうぞよろしく申し上げます。

小林：

堂脇聖美様でございます。

堂脇：

よろしく申し上げます。

小林：

西谷榮治様でございます。

西谷：

よろしく申し上げます。

小林：

吉川勝様でございます。

吉川：

よろしく申し上げます。

小林：

国土交通省側の出席者を紹介いたします。今国土交通省北海道開発局開発監理部次長でございます。

今：

改めましてよろしく申し上げます。

小林：

小松北海道開発局稚内開発建設部部長でございます。

小松：

小松でございます。よろしく申し上げます。

小林：

米田北海道開発局稚内開発建設部次長でございます。

米田：

米田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

### 3. 国土交通省北海道局説明 新たな北海道総合開発計画に向けて

小林：

それでは「新たな北海道総合開発計画に向けて」について私から簡単にご説明いたします。資料2と書かれた「新たな北海道総合開発計画の策定に向けて」をご覧ください。次のページは次の開発計画の策定に向けての主な視点・論点です。現在国土交通省では新たな北海道総合開発計画の策定の作業を進めております。人口急減、超高齢化、グローバル化の進展、大規模災害等の切迫など北海道走行開発計画を巡る状況が大きく変わってきました。地方創成をはじめとして、政府における重点的な政策課題の変化も大きく動いております。そのようなことを背景といたしまして、新たな北海道総合開発計画の策定作業を進めているところであります。基本的な考え方といたしまして、来るべき10年の位置づけということで、下の方に二重囲いで書いてありますが、太田大臣もこれからは10年20年ではなく2050年将来を見据えてどうするのかを考えろというお話がありますけれども、我々

は2050年を見据え、「世界水準の価値創造空間」、世界の中の北海道ということを意識しながら地域を形成していこうと考えてございます。次のページに人口減少・高齢化というグラフがございます。ご承知かと思えますけれども、人口に関しましては北海道は平成9年にピークを迎えて以降減少、全国は平成20年をピークに減少ということで人口減少が全国に比べて10年早く進んでおります。真ん中の上がっているグラフは高齢化の比率でございます。これも全国に先駆けて高齢化が進んでおります。これが北海道全体でございますので、地域によっては高齢化や人口減少がさらに進んでいるところもあるかと思えます。こういったことの中で何をしていくのかというのが大きなテーマでございます。これを受けまして例えば人口急減・超高齢化というところで地域構造、多様な人材の確保対流の促進、人が輝く地域社会という施策を進めていくと。個別には各論にあるような施策を進めていくということも検討してございます。グローバル化の更なる進展については世界に目を向けた産業ということで、「しごと」を創り「外貨」を稼ぐ産業の振興をしっかりとやっていこうと。北海道の場合は農林水産業や食関連産業、観光等をしっかりとやっていこうとすることでそれに対応した施策を考えていこうとすることでございます。大規模災害の切迫ということで、数年前に起こりました東日本大震災、北海道も今年、去年と冬場に気象変動に伴う災害が多発してございます。そういったことを踏まえて強靱な国土を作っていこうと。その中で再生可能エネルギーの活用、バックアップ機能の強化等を通じた強靱な地域の形成を考えて、それに対応した施策を検討していくといったことを考えております。そこで特にポイントになるのが施策推進に当たってのポイントと書いてございますが、「人」こそが、来たるべき時代の北海道の「資源」であり、人材の育成・活用を重点的に実施を強く意識して施策を対応していこうと考えてございます。多様な人材の確保・対流の促進ということで、人口の交流をさらにグルグル回して人の動きをさらに活発化させていこうとすることで対流という言葉を使っておりますけれども、価値創造力を強化していくということで表現してございますけれども、そういったことを生み出す力というのは人であり世界とのコミュニケーションであるといったようなことで、多様な人材とコミュニケーションを通じで新たな価値の創造を深めていくというようなことを今度の計画では大きなコンセプトとして考えていきたいと思っておりますのでございます。そういったことで今回地域の皆さまに忌憚のないご意見をいただきながら新しい計画を作っていこうと思っておりますのでどうかよろしくお願いいたします。

#### 4. 出席者による意見発表【テーマ『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けて環境整備、対流促進』（サブテーマ）雇用の維持・創出】

##### ① ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介

小林：

続きましてご出席の皆様からのご意見を伺いたいと思います。議事次第をご覧いただいでわかるように、大きく 2 つのパートに分かれてございます。1 つはご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介をいただきまして、日頃の活動を踏まえてご意見、特に日頃感じている問題点や解決の方策を踏まえまして、行政や北海道総合開発計画に意見なり期待することをお聞きしたいと思っています。

小池田：

フレイン・エナジーの小池田がご紹介させていただきます。私は結論的に言ってしましますと再生可能エネルギーなどから水素を作りまして、その水素を貯めたり運んだりする技術を持った会社であります。ただ水素エネルギーは普及しておりませんで、こういった仕組みをどう作っていくかというところが非常に重要だと思っております。今日お配りした資料の 1 枚目の製品を作るメーカーではあるんですが、地域、自治体、いろんな団体さんとも連携しまして新しいエネルギー社会、エネルギーを作ることが目的ではなくて、それに伴って地域が潤ったり元気になったり新しい社会が動くことを目的としておりますので、どちらかというソフト重視の提案をさせていただいている、そういう会社でございます。水素の話は詳しく話すことはできないのですが、導入口だけお話させていただきます。水素に対して怖いというイメージを持たれている方も多いと思うんですね。それは間違いでして、プロパンガスより 10 倍薄いガスですので同じ気体量を燃やそうとすると薄い燃料だと思ってください。扱い方をきちんとすれば非常に安全なものです。こういった水素は燃やしても CO<sub>2</sub> が出ないということで非常にクリーンで安全だということから注目をされてきています。しかし水素は水素として存在するものではないので何かから取り出すことが必要となります。今は化石資源などから水素を取り出すことが多いのですが、それでは元をただせばクリーンなエネルギーと呼べなくなってしまうということから再生可能エネルギーの電気を使って電気分解しようという動きが国内外で進んでおります。水素はクリーンで有望と言われているんですが、元素周期表でも一番最初に出てきましたね。薄い燃料ですがかさばります。これを商業地帯に運ぶためには我々の技術で、一度液体に変えてしまつて運びましょう、使う時に気体に戻しましょうということを提案している会社です。8 リットル、ペットボトル 16 本分の水素を有機ハイドライドに置き換えると大きじ一杯になります。1/500 以下の容積にして運ぶことができます。その貯蔵技術を使って稚内で作った水素を液体にすることで東京や離れたところに売ることができるということを提案させていただきたいと思っています。

佐々木：

私の大学は小さな大学ですけれども、地域資源ということでは言いますと、人材を育成することが私たちの一番の使命です。北海道の資源は常に流出しているというのが北海道の歴史で、ここ稚内というところは非常に豊かなところと言えるかもしれないですけれども、そ

これは全く嘘ではなくて、豊かな森の資源が持ちだされてしまったということがあります。これは北海道は長年そういった経験をしておりまして、人口減少の一番の問題は人という資源が出ていくという、確かに少子高齢化ということはあるんですけども、それ以前に稚内は50年前から人口減少は進んでいるわけですし、この地域を暮らしやすい地域にしていく、そういう地域をつくっていく、支えていくための人材をどのように育成していくかは大学の使命だと思っております。私たちの大学は地域の方々がいろいろな思いを込めて宗谷・稚内の産業の発展や暮らしを支えていく、そういう人材を育成することを目標にして、教育や研究に励んでほしいという形でやっております。私たちもそういったことを建学の精神にしまして、たまたま今回のような人口減少があり、特に日本は私学が大学のほとんどですから、私学で教育を担っていく、その私学で地域を再生する、地域を元気にする、そういう最前線に立つということが私学教育界の一番のテーマでずっとやってきたことなんですね。ですから今に始まったことではないです。たまたま2年前に文科省の地(知)の拠点整備事業が始まりまして、特に地方の大学がその地域を活性化していく、あるいは新しい地域を創造していく、そういう最前線に立って地域に貢献していくということを一番の柱に打ち出してきたわけで、私たちもそれに応募しました。私たちの建学の精神と合致しているということであるし、私たち自身も今までそういう活動をやってきたということもあるものですから、それに応募しました。全国からかなり応募がありましたが、3つのテーマを柱にして応募しました。1つは、稚内は全国の中でも道内の中でも進学率は一番下の方なんです。これは進学率を上げればいいということではなくて、やはり小学校、中学校から高校に至るまで、自分たちの住んでいる地域にどのような課題があるか考えるような人材を育成していき、そういうしっかりした学生を育てることが高等教育機関の柱で、そういうような意味で本学が貢献できればいいということで、少しでも進学率を高めていくということも含めて、稚内全体の中で、オール稚内という呼び方をしていますけれども、そういう教育を支える一端として大学は活用していきたい、そういうことを柱にしています。それ以外に今地域に観光では対流人口、交流人口等ありましたけど、そこにはいろいろな意味で貢献できらるうと思っています。それを2つ目の柱にしています。3つ目は先月、市街地ですけれども、私たちの大学のサテライトを作りました。少子化ということもありますけれども、人口は郊外への移動がありまして、中心地の方はほとんど子供がいなくなってそちらに出て行ってしまったということが一番の原因なわけです。やはり中心市街地を含めた稚内市全体のグランドデザインもあるでしょうし、それに対応した形で私たちも貢献したいなと思います。中心市街地は観光、教育の場でもあるので、さまざまな意味を込めたサテライトを作って活動を始めています。その内容については後でお話をしていきたいなと思います。

田中：

留萌から参りました、田中青果の田中と申します。田中青果ということで前身は八百屋でございます。八百屋から始まりました商いなのですが、留萌で根差し商売をすることはどう

ということかということ念頭に置きまして、先代からも言われた言葉なんですけれども、私たちは留萌の地で生きていく、北海道で田中青果の名を売るということで、伝統の味でございます漬物や、いわゆるニシン漬けというものを全国区に広げようじゃないかという心意気で、ただの漬物屋ではない、北海道の漬物屋だという心意気の漬物バカの一人でございます。北海道に根差した食ということで私たちは特化してかかっているんですけれども、北海道民の舌には DNA みたいなものがしっかりと刻まれていまして、どんな小さい北海道の子供でも、ニシン漬けですとか、魚の入った漬物を食べると何か懐かしいという、小学校の子供でも、中学生でも言う言葉の一つです。これはまさに北海道に生まれたという DNA ではなかろうかと思ひ、自分で走り出してしまうんですけれども、北海道物産展ということで全国各地で留萌、田中青果、ニシン漬け、北海道のお漬物屋ですということで商いをさせていただいております。もう一つの顔として 2011 年やん衆横丁の 11 月の実行委員長として呼んでいただいております。私自身が留萌出身なんですけれども、小中高と 10 校学校を変わっておりまして、私は留萌が大好きで生まれ故郷の留萌に戻ってきたということで、自分の中でものすごいエネルギーで親の反対を押し切り留萌に嫁いで参りました。若い人を留萌で育成しないといけないという立場になり、私は留萌の何が好きだったのかと考えたときに、断然留萌の風土が大好きでした。夏の海水浴はもちろんなんですけど、吹き付ける風、凍てつく寒さ、鼻がぺたんくくっついてしまう寒さとか、そういうところにもものすごく魅力を感じていて、夏のお祭りというのはすごくあるんですけれども、私たちは夏のお祭りにエネルギーを爆発させるというのがお祭りのイメージなんですけれども、北海道は冬の期間がものすごく長くて、厳冬を乗り越えてこそそのエネルギーだと常に思っていて、寒い時期のお祭りごとを糧にして夏のお祭りに爆発させるというような、そういった部分で留萌に何かお祭りを起こせないかということで、実行委員という命を仰せつかりましてやん衆横町というのが留萌で始まりました。これは 11 月と 2 月なんですけれども、本当に寒い中で留萌特有の浜焼という、昔の木材工場で寒い中まかなって焼き肉を食べるとというのがやん衆横町の始まりでございます。留萌も本当に人口が減少してきまして、私の娘も大学 2 年生なんですけれども、留萌にいたかった、娘は家業を継ぎたいと今は言ってくれているんですけれども、しかし学校も無く学ぶところがないとなるとどうしても都会に出ないといけないということで今大学で勉強しているんですけれども、私のように外に出てもどうしても地元に戻ってきたいという人を一人でも増やしたい。そこには人との交流とか人とのつながりだとか、それは地域とともに動かなければいけないということで、商いももちろんそうなんですけれども、自分自身の生き方というのもそこに支点を置いております。本日のようにたくさんの皆さまにお会いできることを楽しみにしておりました。私には何の見地もありませんけれども、一主婦、一道民として述べさせていただければなと思います。

堂脇：

豊富町で餅 café & stay わが家を経営しております、堂脇と申します。このような集まり

に参加させていただくのは生まれて初めての経験でどういことを求められているのかということが最初わからなかったので、今自分がどうしてここにいるのかということをお話しさせていただければなと思っています。私は今、毎日奇跡のようだなと思って生きているんです。私は赤ちゃんのころからアトピー性皮膚炎を持っておりまして入退院を繰り返してきたんですけれども、つい 6 年前まで頭の前からつま先までやけどのようなひどい炎症状態でした。豊富町に引っ越すまでは息子が 1 歳半まで旭川市にいたんですけれども、這いつくばるような生活をしていまして、子供を育てていくためには自分の健康を取り戻さなければいけないということで、元々湯治をしていた豊富町に移って今私はここにいます。どうして奇跡のような毎日かという、炎症状態がずっとあったもんですから、真夏でも長袖を着てなるべく肌を出さないようにしていたんですね。でも手は出てしまう。治療にもお金がかかりますので仕事は途切れないようにしていたんですけれども、お茶を一杯入れるだけでも、あまりにも見た目がひどいので「その手で入れられたお茶はちょっと飲めないな」ということをはっきり言われたこともあるんですね。そんな私が豊富温泉の湯治で、飲み薬も塗り薬もいらない、普通に眠れて食べられてという生活ができるようになった中で、今度はもう一歩進んで、入れたお茶を飲んでもらえなかったそれまでの生活から、自分が作った料理をお客様に食べていただいて、お金をいただいて、おいしかったよと言ってもらえるような生活をしています。当時の私にとっては職業選択としては一番遠い存在のところ、今生活の糧があって、本当に夢のような毎日だなと思っています。それが私だけではなくて豊富町には全国から移住の人がどんどんと入ってきているんですけれども、私のように奇跡だなと感じて生きている人がたくさんいます。そんなことを紹介させていただければなと思います。今回のテーマに合ったことに考えてみたんですけれども、人が輝くためには何だろうと考えたときに、希望だとかその人自身が自分を表現できる場所なんじゃないかなと思っています。私にとって仕事とは生きるためのもので治療のためで、そこに夢とか自分を表現するとかは考えたことがなかったんですよ。でも今は餅 café わが家というのは生きるための糧というのはあるんですけれども、もしかしたらそれよりも自分を表現する場所としての意味合いの方が強いのかなと感じています。餅 café わが家は私にとって自分自身を表現する場所であるように、さまざまな人たちが持っている経験や力を発揮して自己表現する場所としても使ってくださいているんですよ。そのことがさらに私にとってわが家を続けていく大きな原動力にもなっていますし、大切な意味だと思っています。何人か紹介したいんですけれども、アトピー性皮膚炎の悪化で体力が低下して 10 年くらい生活保護を受けていたという人もいます。だけど私と同じように元気になってお仕事もされるようになって休みの日にはボランティア活動もしたいというくらい、ここ 10 年で一番元気で生活できていると笑顔で話してくれます。湯治に来るまで前身の炎症で寝たきり状態だったという静岡の方も数カ月の湯治ですっかり元気になって、豊富町の企業に就職してフルタイムでお仕事をされていますし、愛知県出身のヨガの先生や広島出身の Web デザイナーの人はもともと持っているスキルを生かして豊富町内に収まらず道北圏内を飛び回っ

てお仕事をされています。秋田出身の方は湯治をしながらお仕事をし、通信の大学にも通って、国家資格にチャレンジしている人もいます。そんな彼らの姿は本当にきらきら輝いていて、日々の生活を生き生きと、北海道に根を張り生活しています。自分を表現できる健康な体と、居場所を見つけたからだと思っています。私がやっているのは餅 café わが家なんですけれども、今年の3月から stay わが家という湯治移住の方、女性限定なんですけれども、長期滞在の方のためのシェアハウスをさせていただいております。シェアハウスには今いる仲間だけでも東京、広島、静岡、愛知の4の方が暮らしているんですけれども、その方々の暮らしの中でも今自分がさせていただいている活動の大きな柱になるんじゃないかなと感じて生活させていただいております。そこはこの後で意見させていただければなと思っています。

西谷：

私は利尻島で生まれて利尻島で育ち、利尻高等学校卒業後、東京に出て歴史学を4年間勉強してきました。そこで利尻島固有の歴史があることを逆に知りました。中学高校の日本史の中では旧石器から始まって縄文、弥生、奈良、鎌倉とかありますが、北海道には固有の歴史があることを東京にいて初めて教えられて、それで利尻島に戻って歴史学をやってみたくてということで始めたのが利尻町立博物館の学芸員としての始まりです。1977年4月に利尻島内の遺跡の発掘調査に関わってそこから利尻町に採用されました。1980年に博物館のオープンに関わって以来、約36年、今年の3月31日で定年退職しました。今は一町民、一島民として利尻島の歴史調査に関わっております。

私が今まで取り組んできた主なものとしては、資料7に書かれている通り、朝鮮人の漂着記録です。1696年に、礼文島に漂着したとなっており、朝鮮人が残した漂舟録という日誌を読んでいくと泰山に辿り着いたとありますので間違いなく利尻島に辿り着いたということが分かるのですが、その書き換えのための資料調査を進めている中で、それとは別に漂舟録という日記を読んでいくと利尻島の様子、アイヌの人たちの様子が非常にわかってくる。例えばよく書かれているのがクジラの干し肉があったり、魚関係であったり、また、百合の根を調理したものは出てくるが穀物に関しては出てこないという、いろんなアイヌの人たちの様子が出てくる。アイヌの人たちが持っていた玉飾り、衣類の関係、そういったものの他に北から入ってくるもの、中国から北海道へ入ってくるもの、逆に宗谷から江戸に行くものがここに書かれており、1896年の宗谷の歴史的な位置づけというのがここから見えてきます。

また、会津藩の蝦夷地警固を見ると、1808年になぜ幕府の東北諸藩は北を守ろうとしたのか、まだボーダーラインは定まっていない状態でありましたが、なんとなく定まりつつある中で北を守ろうとしたのはやはり海産物を守ろうとしたのではないかと考えられます。本州の食生活を支えるものを供給する地域として北海道が位置づけられていた可能性が非常に高いのではないかと考えられます。

それから40年後にロナルド・マクドナルドが日本に来て、自分の道は自分で切り開くという意識を強く感じています。鎖国の日本に入るためにハワイから捕鯨船に乗って、捕鯨漁が終わってからボートに乗り移って利尻島に入って、利尻島で人々が近づいてきたときに、あくまで自分は漂流していると装って入ってくる。これは日本の鎖国の情報が世界に出回っていることが分かります。そうした中で長崎に連れて行かれて半年ほどの間、オランダ通詞に英語を教えました。それはマクドナルド自身が教えたかったのではなく、日本のオランダ通詞の人たちが英語を学ばなければならなかった、話すようにならないといけなかったという幕末の状況が見える中で、マクドナルドの果たした役割は大きく、マクドナルドがいたことで英語を日本人が学ぶ絶好の機会だったということがみえてきます。

ペリーが浦賀にきて日本は開国したと言われていますが、私たちマクドナルドを研究している人たちの中では、鎖国の扉を開いたのはクジラではないかということで動いています。そういうマクドナルドの調査研究の中で成果が出てきていますのは、利尻高等学校が非常に生徒数が減少してきている。人口減少の中で生徒数を増やすことは難しくても、維持することが、利尻高等学校にいる生徒たちにやる気を起こさせるものとして、自分の道は自分で切り開くために、マクドナルド奨学というのを試したらどうかと島の人みんなで話しまして、「マクドナルド支援の会」というのを立ち上げました。そこで利尻高等学校の生徒は英検准2級以上を自分の力で獲得した生徒であれば、その中から人選してアメリカに派遣しております。今年で3年になりますけれども、2年間で4名行っています。だいたい2週間くらいの日程で行っておりますが、アメリカに行ったときに受け入れてくれる人たちがいまして、私がアメリカに何度も行ったり、またアメリカから日本に來たりして交流ができていますので、そういうアメリカ国内の動きは全て「マクドナルド友の会」が動いてくれます。マクドナルドの生まれたオレゴン州アストリアの高校との交流、お墓のあるワシントン州トロダとの交流、全て「マクドナルド友の会」で、実りある交流ができています。今年も6月に英語検定があり、5人ほど英検を受けますので、その中から何人か合格出るようにがんばれば、次につなげることができるかなと思っております。

近代に入りまして利尻麒麟獅子というのがあり、これは明治20年代に鳥取から渡ってきた人たちが舞っていたのですがすぐに途絶えましたので、それを私たちが調査研究で発見し、鳥取から渡ってきたことが明らかになりました。12年前に、ほぼ100年ぶりに舞いを復活させ、鳥取でも復活依頼があったのですが、鳥取でも舞いを伝承する人がどんどん減少する中で、利尻島に行った人たちの麒麟獅子が復活するのであれば、地元の地域でも復活に向けて動くという、同じような課題のある中での動きになってきております。鳥取には今年で5回行っておりますが、5月24日に鳥取県米子市で第6回とっとり伝統芸能まつりがありました。そのまつりに招待され舞って来たのですが、ここで新たな動きが出てきたのが、3年目に旭川上川神社の能舞台に招待されて能楽師津村禮次郎さんという人間国宝の方と出会いまして私たちが日頃取り組んでいることに非常に興味関心を示し、2年間遊びに来てくれています。今年と一緒に鳥取に行って私が鳥取の実行委員会に情報提供しながら伝統

芸能まつりで能を演じていただくということになっております。津村さんは今年は来れないけれども来年の6月には何人かで利尻島を訪れると言っており、このことにより新しいつながりになります。また今日の夜に、利尻島でホテルがリニューアルオープンするのでそのセレモニーの中で麒麟獅子を舞ってほしいという依頼があることを考えると、やはり島の宝、島の伝統文化としての位置づけができつつあるのではないかとわかってきております。

近現代に入っているいろいろな調査研究をしていると、本州各地から入ってきている人たちが作られている利尻島、北海道全体もそうですが、なぜ本州を出なければならなかったのかという事情を探っていくと、多くの人たちが利尻島を目指してくるということは豊富な海産物があったからではないかと考えられます。ニシン、タラ、昆布そういったものが中心になってきますが、現代ではニシンとタラは取れなくなり、昆布とウニ、ナマコ、ホッケという海産物もかつてほどは取れなくなってきております。そういったものを目指して島に渡ってきている人たち、つまり一次産業の宝の島であったと言えるのではないかと思います。そういったものは事情があつて変わりつつあるということはわかっていますが、いずれにしても歴史をどう現代までつなげるかというのが私たちの仕事でありますし、歴史をしつかりと押さえながらこれから先の利尻島を見ていきたいと思っております。

吉川：

この十何年間、自分の好きなことをやってきてその結果として、資料にある通りなんですけど、これが特別どうしたというのは私はわかりませんが、少なくとも十数年商売をやった実績のみを書いてありますので、これがいいことかわかりませんが参考にしていただければと思います。稚内は非常に大きな問題が一つ残っていますけれども、それはフェリーをどう守るか、来年以降果たして動くのかどうかというのが稚内市長をはじめ頭を悩ましていらっしゃると思いますけれども、いずれにしても船がなかったら物は運べない。ただ私はいろんなところで言っているんですけど、船は大事だけれども、それと同時に何を運ぶのかという中身のことももう少し議論してもいいんじゃないかなと思っています。なぜかというところ5年くらいの間、北海道主催の物産展だとか一昨年より旭川が中心の物産展をやっていますけれども、華々しくやっていますけれども、その結果どうだというと決して成功に結び付いていない。なぜかという、物産展を中心として継続的にも流れるような環境を作らない限りはどのような仕方をしてもしないんじゃないかなと思っています。それに対してお前はどう思っているんだと聞かれるんですけど、私個人の考えなんですけれども、食を通じてサハリンをバックアップしていくべきだと思っています。例えばロシア人は食がジャガイモですが、どういうわけかサツマイモは食べないんですね。どうしてか、理由は簡単です。誰も持っていったことがないからです。ではサツマイモを食べたときにおいしくなくて食べられないものかといったら私はそうじゃないと思っていますから、そういったおいしさをもっとPRすることによってサツマイモも売れるのではないかと思います。

す。あるいは長芋はどうかと。かつて 30 年くらい前に台湾人が長芋を食べたときに、これは人間の食べるものではない、気持ち悪いと言った台湾人が、今帯広の川西農協が台湾に約 1000 トン以上も出しています。川西農協は今度アメリカにも出すと。たぶん長芋は世界を制覇するといったら大げさかもしれないですけども、世界各国に売れる可能性のある食材ではないかと思えますけれども。そういうふうに考えれば我々が多少リスクがあってもそういったことに挑戦して、そういうことが少しずつ航路の荷物の支えになる、というようなことで私は、そういった願いが 10 年後 20 年後の北海道を作るんじゃないかなと思っています。テレビで見たんですが 3 年くらい前に夕張の若い市長がメロンを 30 玉くらい飛行機でカタールかどこかに運んだというニュースがありましたが、それは全てポケットマネーだと。しかし通関が厳しいから 30 玉くらい持っていったら非常に喜ばれたと。私はあれを見て、半分は評価しますが半分は評価しません。なぜなら毎回毎回タダで持っていったらこれは商売じゃない。30 玉の内、半分はポケットマネーでいいけれども、半分は腐らしてもいいからどうして正規の通関をしなかったのかと。正規で通関をしない限り、メロンの発展はないと私は思いました。去年の物産展の時に、私はしませんでしたけれども、旭川かどこかの業者の方がいろんなものを持って行って、花を持って行ったと聞いたんですけども、残念ながら向こうでハエが出て通関できなくて処分されたと。今年やるのかどうかわからないんですが、私に言わせてみれば、たかだか 1 回や 2 回失敗したところでどうしたもんだと私は思っていますけれども。5 回、10 回やれば必ず通関できると思います。花は相当大きな市場になるんじゃないかなと思っていますけれども。会議所の中田会長もおられますけれども、いろんな方に聞かれますのが、もしフェリーを運航する場合、北海道の補助があるらしいという話も聞きますけれども、万が一、北海道の補助が出た場合に稚内でないといけない理由はないと。もしかしたら小樽、石狩かもしれないという話があると聞いていましたけれども、私は稚内じゃないと駄目だと言っていますから。なぜなら、稚内から野菜でも果物でも持っていったら今日の朝船で持っていったら今日の晩の内にサハリンに着きますから。翌日の朝通関したら昼にはスーパーに並ぶ。これしか鮮度を保つ道はないので、ぜひ稚内から走らせてほしいと。食べるものを中心として荷物を作ってやることによって将来的に継続的な安定が図れる航路ではないかなと思っていますけれども。10 年、20 年後にはこうやって話していることがスムーズに流れている時代が来るのかなという気がしますが、決して難しい航路ではなくて、ロシア人の命を守るといったら大げさかもしれないですけども、そういった考えを持って取り組むべきかなと思います。ちなみにロシア人は平均寿命は 61 歳くらいで、私たちくらいのはいませんから。そうじゃなくて北海道の食を広めることによって多少は伸びる可能性はあるというふうに考えたら、夢のある話ではないかなと思っています。

## ② 日頃の活動を踏まえてご意見

小林：

ありがとうございました。かなりバラエティに富んだお話があり、皆様のご意見を伺いながらいろいろなものが生まれれば良いなと思っております。課題なりご自分の例でよかったこと、悪かったことなどございましたらお願いいたします。その後意見交換に移りたいと思います。

吉川：

夢のある話をすれば、10年後、20年後の北海道を考えた場合、挑戦すべき時期に来ているのかなと思います。高橋知事が選挙の時に食の輸出を500億から1,000億に伸ばすと公約というか目標を掲げたんですけども、私は食ばかりではなく、航路、対サハリンに対して食べてなくなるもの、使ってなくなるもの、消費財というものをもっと有効に彼らに提供する。そういう夢を持っているんな方が挑戦すべきじゃないかなと思っています。資料の中にタマネギの話もずいぶん出ていましたけれども、私一人で7,000トンやりましたけれども、私みたいなのが10人いれば7万トンくらいできることも無きにしも非ずと思っています。いろんな方が挑戦してこの航路を有効活用する、例のウクライナの問題でロシアはアメリカとヨーロッパの輸入がストップしています。日本だけは制裁に入っていないので、言ってみればチャンスなのかもしれないですけども、稚内からサハリンに持って行って、そのついでにもっと上の方に持っていく可能性もあるんじゃないかなと思います。先ほど留萌の方が漬物バカと言っていましたけれども、今年の9月に帯広に芽室出身のクモダさんという人がいるんですけども、アメリカに豆腐を売ったという話を飲みながら聞きました。森永乳業の社員で、30年前にアメリカに行って豆腐を売って来いと社命を受けて単身乗り込んで、一番先にやったのが冷奴でデモンストレーションをしたけれどもアメリカ人は見向きもしなかったそうです。次に味噌汁にしたがこれも売れない。どんなことをしても売れませんでした。ところがある日、返品になったたくさんの豆腐を品のいいおばあちゃんが全部買っていきました。うれしくなって「どうやって食べるんですか」と聞いたら、「箱から出して食べる」という。「誰が食べるのか」と聞いたら「犬が食べる」という。つまりアメリカ人にとって大豆とは油を取るためのもので、その絞りカスは家畜の食べるもので人間の食べるものではない。宣伝に行くと連れていかれるところはペットフード売り場だったそうです。そこでその人が森永の社長に「ヘルシーペットフードを売りましょう」と提案したところ「犬猫に食べさせるために作っているんじゃない、お前はクビだ」というようなことを言われて頓挫したという話があって。最後は食べたのがヒラリー・クリントンが豆腐が大好きだということで、旦那さんはビル・クリントンで「うちのビルは太りすぎだから豆腐を食べさせている」と言って非常にそれから注目されだしました。アメリカ人はどうやって食べるのかというと、豆腐を全部シェイクにして食べる。ミキサーにオレンジやバナナと豆腐を入れてシェイクにして食べるのがアメリカ流だそうです。彼が言っていました、

おそらく 60 億の市場になるのでこれから世界各国に向けて豆腐を売っていきますと言っていました。私も彼に「去年長芋をサハリンに持って行ってずいぶんバカにされました」と言ったら「吉川さん、1 年目で成功することなんてない。5 年やれば豆腐でも長芋でも売れる可能性がある。夢を持ってやりなさい」と励ましの言葉を言われました。彼は「30 年したらアメリカ人は糖尿病だらけになる。朝からハンバーガーやピザを食べている人種が太らないわけがない。これからまさしく豆腐、納豆の時代が来る」と言っていました。私は野菜だけではなく日本の体にいい食べ物を世界に向けて売るべきなのかなと思います。その試金石として航路があるんじゃないかなと考えております。誰がやるかは別にして豆腐でも納豆でも持って行く人がこれから北海道で出てこないはずかなという気はしています。

西谷：

私は歴史的にも利尻島の調査研究をしております。それらは現代の課題、これから先の利尻島のあり方にどうつなげていくかというときに、まず歴史を学ぶことが大事であるということはもちろんのことだと思います。

私の資料の 6 ページに書いてある、志摩の海女がテングサ採りに明治 20 年代に渡っていることを追っていくと大正時代に入っていきますが、昭和 30 年代に利尻島テングサは長野県に出荷されていて寒天の原料にされていました。そのころは取る人も利用者もたくさんいたのですが、今はテングサを取る人が全くいない状況になっており、それは取っても売れないからということです。そういった中でかつては海産物を目指して多くの人が利尻島に渡ってきましたが、海産物が今は昆布とウニという非常に狭い形になっており、かつての歴史を今どう伝えるのかというのは、海の生態系も変わってきていること、漁師の人たちの平均年齢が 65 歳くらいと高齢化が進んでいること、また、海産物の生産量も減少していること、このような非常に厳しい状況の中で、課題としては海の生態系をきちんと見つめて、取り組まなければならないということです。しかし、海の質の変化となれば利尻島だけでできることではないですが、いずれにしてもそういった情報を利尻島から発信していかなければならないということと併せて、今利尻島を目指して来ている人たちが目指している「最北の島」、その島らしさを出すべきだということは常に思っています。

私が住んでいるところから博物館まで片道 12 キロ、往復 24 キロの道を通っていました。博物館を始めたころ、1980 年代は道路も狭くてカーブも多かったですが、今は道路も広くなりカーブも少なくなり通勤道としては非常によくなりました。ただ、そこで改めて考え直すと道路を拡張工事するときに法面をきれいに整備してそこに芝を貼っていくと帰化植物が増えてきております。ということは利尻らしさが消えていく可能性が高い。島にいる人たちにとっては道路が使いやすくなったというのは非常にいいことですが、利尻を売ることの中では、帰化植物をどうにかしないとイケないと思っております。そこに元々あった植物が、春になるといろいろ咲きますが、そういったものが年々なくなってくると、ここが「北の島」であるということを感じさせる環境要素が消えつつあるのではないかなと思って

おります。島の人にとっても便利で機能性のあるもので、利尻島を目指してくる人も「北の島」だと感じる、住んでいる人と来る人とで共有感を持たせる島づくりが重要になるのではないかと強く感じております。そうした中で歴史的な要素をいかに活用するかですが、先ほど言ったようにマクドナルド奨学基金の会を作って支援したり、麒麟獅子舞う会を作って鳥取との交流を深めながら、いろんな依頼がある中でできるだけ対応していくことだと思っております。自己財源を確保しながら、より島の遠くに出ていくのは非常に難しいかなと思いますが、いずれにしても活動を地道に続けていって、できるだけ対応することによって利尻が多くの人に知れ渡ることになりますので、それらの活動はこれからも続けていきたいと思っておりますし、「支援の会」も「アメリカ」とも「友の会」とも交流を持ちながらバックアップと応援をしていきたいと思っております。いずれにしても歴史と今が結びつくということはなかなか難しいとは思いますが、過去の歴史と利尻島をつなぐというと、かつてはエゾカンゾウの大群落地もたくさん利尻島の中にあっただのですが、今はそれもなくなってきています。湿原も乾燥化してきてエゾカンゾウが生えなくなりました。住んでいる人にとっても便利で住みやすい島であると同時に、島外から来る人に利尻島は「北の島」であるということを感じるような島全体の島づくりに取り組んでいかないといけないのではないかと思います。併せて、チシマフロウを増やすという時に島外から花を持ってくるのではなく、元々利尻島にあった花を、工事があるのなら工事の時には他に移して工事が終わったら元に戻すようにして、利尻島にあったものを残していく、未来の利尻島に残していく、そういったことが必要なのではないかと強く感じております。

堂脇：

私も長芋が大好きで先ほどの話を聞いて、アトピーの子たちはアレルギーを持っている子どもも多くて豆類に反応する子もいるかもしれないですけど、お店に来る人の中では少なくても、豆類を使ったメニューをたくさん出しているんですけど、そんな中で子供たちに人気があるのがお豆腐を使ったアイスクリームが、ただフードプロセッサでドロドロにしてそこに小豆を入れて凍らすだけでアイスクリームみたいになるんですね。そういうのをアメリカの人たちが食べてくれたらいいなというのを思いました。豊富町には全国から移住したい、湯治したいと思っている人たちがたくさんいるんですね。でも現実には繁忙期は町営のふれあいセンターのお風呂が本当に狭くて、アトピーの人たちが来て元気になっているのでどんどん口コミで広がって湯治客が増えているんですけども、受け皿の問題があるんですね。これ以上湯治客が増えても今のままの建物だと感染症とかそういった問題が出てトラブルになるんだろうなとわかってはいるけれどもなかなか対策をすぐにとというのは難しいだろうと思ってみえています。また移住したい人にとっての一番の問題は住む場所や働く場所がないことなんですね。私や私の周りの移住者は皆自力で豊富町で生きていく糧を見つけたからここで生きていけているんですけども、もっと最低限生活するだけの仕事や家、彼らが生きていくための受け入れ態勢、サポートがあったら、移住していく人

は間違いなく増えるだろうと思っています。豊富町は人口 4,200 人ほどの小さい町なので、町だけの力でこれを整備していくというのは難しいだろうなと思っていますので、そういった部分は国とか何かサポートしてくれるようなところがあったら助かる人がたくさんいるんじゃないかなと日々感じています。今移住者はほぼ大人なんですね。私の息子のように私と一緒に幼児のころに移住して来るというのはほとんどないと思います。でも本当はもっと小さいころに薬から離れて湯治等で健康になればもっと人生の可能性が広がるんじゃないかと、私は赤ちゃんのころからアトピーだったのですごく感じています。小学生中学生は子供だけの完全移住は難しいとは思いますが、長期のホームステイや山村留学、高校生や大学生は一人で下宿して湯治しながら学ぶこともしていけるんじゃないかなと思っているので、そんな部分でも受入体制が作れたらもっと北海道で輝ける人たちが増えていくんじゃないかなと思っています。そんな中で私が今年の 3 月からさせていただいているのが、移住への第一歩としてお互いにいい距離感でサポートし合えるシェアハウスという形でさせていただいているんですけども、実は今日息子さんが熱を出したので迎えに来てくださいと小学校から電話がありまして、もし私が去年までのように息子と二人暮らしだったらここに座っていられなかったんですね。せっかくの貴重な機会だったのにあきらめなければいけなかったんですよ。でもシェアハウスの方が連絡を取って子供を迎えに行きあげると言ってくれたおかげで今私はここに参加できているので、住んでいる人たちにはこんな環境を作ってくれてありがとうと言われているんですけども、私もサポートされているという現実があります。もちろん自分で自立して生活できればいいと思いますが、まずは本州から北海道に入ってくる際の第一歩として地元の人とすぐにつながる、シェアハウスはそういうところだと思うので、そういうところがこれから増えていけばもう少し移住への垣根が低くできるんじゃないのかなと感じています。今現在、シェアハウスには東京、広島、静岡、愛知の各地の 4 人の人と生活をしているんですけども、数か月前までは食べること働くこと寝ること、みんなが当たり前にすることがままならなかったんですね。豊富温泉での湯治で健康への土台を手に入れたことで今はそれぞれが本当にやりたいことをしていています。私にとって豊富温泉は宝物というか命の恩人と思っているので守っていきたいんですよ。全国の湯治客にとっても心のお守りになっています。遠くてアクセスも不便なので、ちょっと悪化したからすぐに行こうというところにはないんですけども、全国を見てもここの温泉のような効能のところはなくて、東京や広島の先生は豊富温泉に行っておいでと送りこんでくるんですけども、来た人がよくなって帰るのでどんどん患者さんも増えているのかなと思って見えています。4,200 人の町民だけでこの温泉を支えていくというのは厳しい部分があるので、これを北海道の宝として皆さんにも注目していただいて一緒に守っていただければなど切実に思っています。私自身も自分が健康な体でいられるということに感謝して、今の自分ができることを、育児中心になるので手を広げてということにはならないですけども、これからも続けていきたいなと思っております。意見とかお願いとしては移住の人たちが北海道に入ってくるとき

に、入ってきやすいアクセス整備や仕事を探すサポート体制があればというのが私の意見です。

田中：

道外の方に留萌の場所を説明するときに、稚内のちょっと下ですと説明するんですけども、稚内までの道のりが秘境に感じてすごいところに来たと感じたのですが、同じ北海道の沿線にいながら、稚内に来たのは久しぶりなんですよね。大人になって1回と、5歳くらいの時にノシャップ岬に行ったことしかなくて稚内は秘境だと思いました。交通網で留萌から稚内は車以外何かいけるのかという感じで、全く未知の世界で、まだまだ北海道は札幌、旭川、函館、小樽くらいしか名前が出てこないんですけれども、留萌や稚内を含めてツアーや旅行にも力を入れないといけないと思いますし、昨今思いますのは、漬物を流通するとき漬物は4日間くらいの賞味期限なんですけれども、本州に持っていくと翌々日に着くんです。しかも物流費がものすごく高い。この物流費が私たち食品業界にはネックになっておりまして、どうしても物流費を乗せなくちゃならない。ロットにもよります。本州に売るとなるとバイヤーさんは生鮮物なので少し置きたい、でもロットが絡むと送料が高いということではなかなか一歩が踏み出せないというところが非常にあります。その物流のシステムを道のバックアップをもらいながら北海道の食を外に広めるということが一つ課題ではないかなと思います。次世代ということで若い人を大切にするというのは、それはそうなんですけど、私個人としては、私たちが個々に現存しているのは先代の人たちあつてのことなので、例えば健康の食もそうですけど、先祖の方が伝統の食を作ってくれたので商いをしていれるということなんです。ニシン漬の作り方を私たち世代の人が何人知っているかなと思ったら、私は漬物屋なので漬けられますが普通の人は漬けられないと思うんです。それはまさに危惧することであって、そういうことを高齢者の方から学ぶというのがキーワードになると思うんです。例えば北海道にはゆず酒とかニシンとかそういった作るのはお母さんやおばあちゃんにはかなわないんです。特に私がニシン漬を作っていて思うのが、物置におばあちゃんが行ってしぼれた樽をトンカチで割ってシャリシャリになったニシン漬をどんぶりに盛って食卓出すというような情景が浮かんできて自分たちのニシン漬づくりもそこにコンセプトを置かないといけないといつも思うんですけれども、その状況をいつまで持っていかないといけないのかなというところがあって、私たちは年に何回かニシン漬教室ということで留萌市の観光協会さんにバックアップをいただいてやらせていただいているんですけれども、北海道ならではの伝統の食というのをもう一回掘り起こして、それには北海道在住の諸先輩たちにそういった知恵をいただくというのは非常に大切で、私が最後に目をつぶるときには私は留萌に貢献できたかもしれないと思って死んでいきたいと思っているんですけれども、そういった本当の地域づくりというのは若い世代を育てるのももちろん大切ですが、高齢者の方にお知恵をいただくのも大切なことだと思います。デイサービスとかに力を入れるのもそうなんですけれども、生きがいを見つけ

ていただける場所を作っていただくというのも北海道を元気にする一つなのではないかと思えます。

佐々木：

今の田中さんのお話を聞いて、私が育ったのは共和町で昔から落ちたリンゴを使ってぬか漬けにして大根を漬けていました。リンゴの甘さがすごくおいしい味付けになり、作ろうと思ってもなかなか作れない。僕の母親はいつもそれを作っていました。やはりそれはいろんな人が作ろうと思ってもその味というのは出せないんですね。でもそういうものは自分たちの生活を作ってきたものなのでそういうものは大切にしたいなと思っております。ピクルスとかトマトを漬けてみたり、もしかしたらサハリンに行っても十分いいかもしれないという、そういう発想がすごくいいなと思いました。先ほど堂脇さんの話を聞いていて、私の大学でも実は豊富町の方へ学生たちが行って映像作りをずいぶんしています。豊富町はご存じのとおり宗谷の管内では最初に消滅可能性都市と挙げられてしまい、厳しい状況だけれども、今お話を聞いている限りはこれだけ人が入ってくる。一生懸命移住をしてもなかなか難しい中で、これだけ入ってくるということはそれに悩んでいる人がいるというのはもちろんなのですけれども、やはり豊富温泉という素晴らしい資源があるからですね。それを生かしていくというのは地元の連携の中でやっていく必要があると思います。先ほどお話していたケアハウス、それは入ってくる人がいればそれを支える働き場がかならずできるはずですね。地元の金融機関とかいろいろな支援は必要でしょうけれども、ここにはそういう形でも働き場は必ずできる。人口の減少を食い止めるのは難しいけれども、それには入ってくる分を増やすのと出ていくのを食い止めるのと両面ありますけれども、少なくともこれだけ入ってくるという状況が潜在的にあるところは消滅の可能性が少ない町になる可能性があるわけで、これは行政の皆さんもぜひ参加して支援していければいいのではないかなと思います。働く場がそこにできるのと同時に学ぶ場があれば、僕たちが一番大事だと思うのは学ぶ場と働く場がきちんとあってそれが循環するという仕組みが地域にとって必要なんですね。田中さんの娘さんも学ぶ場がなくて出ていかざるを得ない。私たち大学の欠けているところもまだまだあるから学生募集にも苦労していますが、働き場があって、それを地域の人たちが作ってくれているということがあるんですね。ですから学ぶ場と働く場をきちんと支えていくというのは大学だけでできるわけではないし、特定の団体だけでできるわけではなくて、連携した力が必要になるだろうなと思います。大学では例えば今の取り組みだと、例えば豊富町では夏休みにうちの学生が行っているいろいろな支援をしようとか、こういったことを豊富町と協定を結んでやることになっています。これは猿払とか利尻町とか豊富町とかいろんな協定を結びながら、学生や私たちが出向いて行って、稚内と宗谷全体での学ぶ場とそこでの教育の水準を少しでも上げていく。その結果としてそこで働いてそこで暮らしていく。そういう仕組みを何とか作っていければなと思っております。今のようなお話を聞いて、私たちのやるべき責任は本当に重いなと感じております。

小池田：

今日、多くの方の携わっている仕事や生き方の話を聞いて、すごく刺激を受けるところが多くありました。その中ですごく感じるのは私も北海道にいながら青森や福島とかいろいろなお邪魔させていただく機会がありまして、地方地方に文化や習わしがあってその古いものを大事にしていくというのはすごく大事なことだと思いますけれども、同様に人口減や生産人口の低下ということにどの地方も悩んでいて、何かやらないといけないというのは皆思っているんですね。でもやらないで10年経っているということを感じておりまして、私たちが感じているのはやらないリスクがだいぶ大きくなってきていると感じております。これから5年10年と考えていくと、黙っていて今より良くなるということとは考えにくいんですね。今回、新しい北海道総合開発計画が新たに10年先を見越してということで考えられるということで、5年後10年後、どうやったら北海道や稚内や道北が強くなれるのかということテーマに皆さんの資料などを見ながらお話をさせていただければなと同席しながら思っておりました。私はエネルギーの立場なのですが、エネルギーの話をして、電気を水素にという考え方もあるんですけども、それが住んでいる人にどう影響するのかということ結論として得ないと、この話は何も意味がないと思うんですね。今日の話聞いていて、稚内とか豊富町もそうなんですけども、資源がありながら気づいていない、使われていないということがかなりあるんじゃないかなと思うんですね。それは生き方の中で、個人としていろんな事をチャレンジすることはすごく興味深いと思っておりますが、地域が点でなく面で活動していくと相乗効果があるのではないかと非常に感じました。稚内に私が非常に魅力を感じているのは、留萌からの海岸線を走っていて思うのは、何度停まったかわからないくらい写真を取りながら上がってきたんですけども、冬は天候が変わる前に一目散に帰らないといけない地域だと思うんですね。今まで風力発電が建つまでは非常に厄介だった風が資源になってきていますよね。この風は活かせば資源になりますし、サハリンとの入り口も、福岡に行って思うのがアジアが勢いづいたときにその入口の知恵や工夫があることで伸びるということを実感しておりましたので、稚内の特徴というのは、ここにしかない特徴というのがあるんじゃないかなと感じました。ただエネルギーのことについて触れると、電力に関すると、発電をするんですが、電気のルートでつないで光と同じくらいのスピードで動きますから、今稚内で発電していても、地元にお金が落ちていないというのが正直なところだと思うんですね。また電気代が安くなったという実感も伴っていないと思うんですね。地元の人が発電するのは別ですが、道外から来た人に発電事業をされてしまっただけではお金にならない。上にお金が通り過ぎて行っている状態だと思うんですね。できれば電力システムを地元の人がやるべきだし、さらに私たちが苦前で提案しているのは、この稚内を全国に先駆けて風力発電をいち早く実施した地域、言い換えると売電を開始して20年間非常に高い値段で買ってもらっているんですけども、その期間がいち早く終わる地域でもあるんですね。そうならばそれを建て替えるなり、更新するなりいろ

いろいろ方法はあると思うんですが、建て替えをしようとしたときにまだ送電線が強くなっていませんよね。まだこの席数しか受け皿がない状態で、例えば20年経ったからもう一本足したいとなっても建てる場所がないから椅子を譲るしかないんですね。私がこの席を新しい風車に譲ったら新しい風車はそこから20年間高い値段で売れると思うんですね。私は席を譲ったからといって電気を起こせないわけじゃない。ですから稚内の今の風車は例えば建て替えたときに捨てる必要はなくてその発電能力を生かして、水を電気分解して水素を作り出すことができると思うんですね。風を生かすためには今ある施設を含めて生かし方はいくつも考えられるんじゃないかなと思っています。水素を中心に話をしていますが、水を電気分解するので水素と酸素が出ます。また、電気分解すると、電気分解装置の使用による発熱、つまり余剰熱が出ます。熱と酸素は運びづらいので地元で使いやすいと思うんですね。熱源として地元で使うと、豊富は確か天然ガスも出ますよね、老朽化しているのもあってなかなか使いづらいかと思いますが、水素と天然ガスというのは相性の良さがありますのでどんどん使っていくとすれば、我々は電気よりガソリンや灯油が高くなると困るんですよ。そういう化石資源を取り換え部分を水素が補えると、燃料が地元の燃料になるのでお金が回りだしますよね。例えば北海道全体で言うと、ちょっと古く7、8年前のデータですけど、北海道を一つの国と見立てると23兆円くらいの経済規模があって、それを例えば外でお金を稼ぐ、先ほどのサハリンの穀物の話もそうだと思いますが、外に売って利益が生まれるのが3000か4000億。これは食品だったりします。一方1兆円を超えるものを買ってきている。歳出超過ですね。大半は中東の化石資源。つまり油を買うことで自分たちの生活基盤をかなり脆弱化させてきている。でも50年前って石炭を売って潤ってましたよね。ですから燃料を買うか売るかによって地元の人たちの利益というか社会構造が大きく変わると思います。稚内には風があって、水素に変えると売ることができると思っています。それに伴って水素の場合は送電線を使うんじゃなくて地元で酸素も熱も落ちますし、流通のことを考えると稚内が水素油田になると思うんですね。そうすると地元に対して仕事や雇用等の産出につながるんじゃないかと思っています。今日やって明日なるかというところはならないですが、こういったことを目指して5年10年かけて考えていくためには、稚内には十分な背景があるんじゃないかなと思います。最後に一つ付け加えさせていただくと、そういう価値を北海道に感じていまして、北海道でそういう風力発電、このあたりにずっと建っている風車がですね、このあたりのをまとめるだけでかなりの燃料をまかなえる。そういった能力があります。そういったものを利活用することを、最初に言った東京オリンピック、東京都さんが燃料電池や水素の先駆的な需要者になろうとしていますので、そこに提供しようというのを我々もそうですし、自動車メーカーさんや商社さんとポテンシャルを最大化しようということで提案をしているところですので、そういったことを稚内や北海道北部が実際にプレイヤーを立てながら関わっていくのが、豊かな資源を生かして稚内が魅力ある土地になる方法の一つではないかと思っています。

## 5. 意見交換

小林：

さまざまなご意見ありがとうございました。国交省側の方から何か質問や意見はありませんでしょうか。

米田：

今の水素のお話なんですけれども、稚内は非常に風のポテンシャルが高いところだと思うんですけれども、全国各地、道内にもライバルがたくさんあるわけですよね。例えば稚内ですと水素を売るとすれば消費地から非常に遠いというデメリットもあるわけですよね。稚内のポテンシャルは全道、全国と比べてどのくらいの位置なのか教えていただければありがたいです。

小池田：

かなり有数の地域なのは間違いないです。私は青森県の八戸市さんの再生顧問をさせていただいて、下北の周辺の風車の適地のところも関わっているんですけど、風車には風がいるのはもちろん大事なんですけれども、宗谷は三方から風が入ってきますから年間の稼働率が4割超えると思うんですよね。全国の平均がだいたい16~17%ですから倍以上の利用率があって、同じように高いところは日本海側の沿線なんですけど、留萌もそうですし、苫前もそうですけど早かったので、崖や海に近ければ近いほどいいだろうということで海沿いに建っている風車って結構多いですね。風が強いと崖にぶつかって上がるので、かち上げになってなかなか利用率につながらないというのがあるんですね。つまり実際に利用率が高いのは稚内ですとか津軽とかですね。風力発電に関してはそうなんですけど、青森の場合は建てる場所がなくなってきて山の上とかに建てるようになってきました。そうすると風車の建設コスト、そのために道をひくとかのコストが出てきたり問題が出てきて、実際に建てられるような場所がなかなかないというようなことがあります。もうひとつ消費地。水素に変えたときに有機ハイドライドという液体に変えてしまうので、ペットボトル16本分の容量であれば大さじ一杯。150人乗った人の容量と同じくらいの水素にしようとするで一斗缶くらいになります。かなりコンパクトになって、かつガソリンと同じ規制ですので、ガスを運ぶと非常に高いんですけど、油だと200キロ先でも4円くらいしか値段が変わらないので、稚内には港もありますのでそういったことで運べばコストもかなり安くできると思います。

小松：

吉川さんにお伺いしたかったですけど、ロシアでものを売るんだというのは非常に夢

のあるお話なんですけど、実際にここから出そうとすると、道内の産品の農産物、この地域で言うところの酪農産品というようなものが中心になっていくとお考えでしょうか。道内産品をロシア、サハリンに売るとというのが1つの物流のカギになるのでしょうか。日本中の米から何かからも含めてロシアに売るとか。そのあたりの売り物、売れ物はこういったことをイメージされておられますでしょうか。

吉川：

ここ5年くらいは北海道が中心になって道物産展とか、2年くらい前から中心になって旭川物産展とか、これは非常に行政のエゴなんです。留萌の田中さんもいますけれども、留萌市の予算を使うから留萌のものでなければだめだとか、紋別の予算を使うからメイドイン紋別でないだめだとか、市長がいるから我が町のものをとか。それは税金が入っているので悪いわけではないけれども、彼らが望んでいるものでなかったら意味がないと思うんです。私は別に北海道のものでも日本全国のものでも構わないから、彼らの望んでいるものを稚内から発信するべきだということです。ただ野菜は鮮度の問題がありますから、例えばタマネギを島根まで持って行って島根から輸出するとか、逆に新潟のカキとか島根の梨を稚内に持って来て輸出するというのは愚の骨頂だと思っています。一番近い産地から、港から運ぶということしかないと思うので、タマネギは全部北海道から出すべきだと思います。梨は鳥取から出すべきだとか、産地から一番近い港から供給するということができないと思います。ただロシアの事情もここ2、3年でガラッと変わりました。なぜ今までロシアができなかったのかというと、物を持っていっても何日で通関できるのか、持っていかないとわからなかったんですよ。1日なのか1週間なのか1カ月なのか、物によっては1カ月も止められることもありますけれども、ここ2、3年でガラッと変わりました。先ほど私が申し上げましたけれども、メロンやスイカは今日持っていったらすぐ通関できますから、今日持っていけば翌日の昼には店に並びますから。イチゴだって可能性がないわけではないですし、サクランボがいいのかモモがいいのかわからないですけれども。一番近い港から安全安心なものを供給するということが道が開けるのかなと思いますけれども。ただ、自分のところの予算を使うから自分のところのものしかだめだという、そういう発想は捨てるべきかなと思います。

小林：

何人かの方から、出てきた意見の中で、最近東京の部会でも議論になっていることに近いものがあつたので紹介しながらご意見をお聞かせいただければと思います。まず西谷様の方から、道路を作った時に法面の舗装をして、例えば芝生にすると、外から来た植物で地元のものなくなる、要するに便利さを追求することによって他の問題が発生するというお話があつたんですけど、あと風力のことでこの前、部会で観光の先生なんですけど、北海道の観光地は景観が非常に重要だという中で風力や太陽光がドカンとできると、景観を

崩すんじゃないか。そういうことを考えながら風力なり発電なりのシステムを考えた方がいいんじゃないかというお話がありました。今日の西谷様のお話もそれに近いところがあるんじゃないかと思いますが、そういうことをするときには利尻島の中で、地元の方と利尻を目指す方が一緒になって何か考えて利尻の魅力を高めるのが大事じゃないかというお話があったかと思います。新しい計画の中で関係者が集まったプラットフォームを作ってそこでいろいろな知恵を出し合おうじゃないか、行政なら行政だけとか誰かが引っ張っていくというのではなくて、関係者が集まるプラットフォームを作るのが大事なんじゃないかということもあって、先ほどの景観の話も西谷様のお話も、外の方と中の方が集まるような形で、共同できるような場ができればいいのかなということを感じました。実際に西谷様のような考えは利尻島の中で固有種が失われる、北のいいところが失われるという危機感とか、何かをやるという動きはあるんですかね。

西谷：

実際に帰化植物を取り外しているボランティアの方々があります。帰化植物を取らないとどんどん増えていきますので、島の景観を残すために頑張っている人たちがいます。一方で、登山道において歩道面を作るとどうしてもそこに帰化植物がどんどん増えていきます。それを取り除くのが大変な作業だということはもちろんわかっています。利尻島の森林公園で森を歩こうといっても歩くと法面に帰化植物がどんどん生えてくる。元々あった花が消えかかってくるという危機感を持っている人もたくさんいますが、そういったものも組織的には動いていない状況なので何人かで起こしていかないといけないと思っています。それはそこで生活する人たちの価値観ではなくて島に来てもらうための価値観で捉えないといけないんですが、景観を変えるということになると、風力発電にしても、島の人たちにとって生活の中で必要なものであればそれはやっていくべきだと思います。それと島に来てもらうためにやっていくことが密接に共有化されていないというのが実態なので、その辺を先ほど言われましたように皆で話し合っ、島の人、島の外の人、観光に絡む人たち皆で話し合っ、どうするべきかを考えるべきだと感じております。

小林：

観光地でもそうなんですが、外の人が入ってきて、バードウォッチングが道東で流行っているということですが、「そんなものはうちの庭先にいくらでもいる、そんなものが観光になるのか」というのは外の人が入ってきてこれが資源になるんだということに気がついて、こんなので来るんだということに気がついて始まったので、意外とよそ者の方の知恵が生きて地域が盛んになるというのが結構あります。利尻島の場合は逆に自分たちの中からそういったものを守っていかないといけないという動きがあるのかなと感じておまして面白いなと感じております。前々回のパートナーシップ会議の時に移住の話で職場がないじゃないかということで、地域で働いている方から、確かに固定の職はないが、意外と田舎は忙

しいんだ、農業が忙しい時は草むしりをはじめとしていろいろあるのでそういうのを組み合わせるとそれなりに収入が出てくるもので、転職はなかなかないんだけどもそういう形に入って行くことは可能で、地域の人たちと交流して信頼も生まれて次のステップに行くという話もありました。ただよそ者の人が急に来てもそういう仕事は見つけれないので地域でコーディネートする人、それが行政なのか町内会の役員なのかはいろいろあると思いますが、そういうのがあるとうまく回るんじゃないのかなという話が出た記憶があります。今日も何人かの方から戻ってきたときの仕事が大事だということ、仕事がなかなかないよね、堂脇さんの場合は仕事を見つけられた人が踏みとどまってるということがあるんですけども、仕事をどうやって作っていくか、見つけていくか、或いは地域のコーディネーターが大事だというのがあるのかどうかというあたりを少しお伺いしたいです。例えば田中さんは親に反対されても留萌に戻ったそうですけれども、戻るときに一番心配したことに職の部分はあったんですかね。

田中：

ちょっと職とはかけ離れるかもしれないんですけども、商人ということ言うと、親からすると公務員の方がいいんじゃないかというのもありました。職のことだと、実は私たちも人手不足なんです。人を募集しても人が来ないんですよ。なぜかという時間外とか残業とか休みの問題とか、漬けものなので寒いか、夏でも冷蔵庫で作業しないとイケないということで、留萌全般で職があるのに人が来ないというのが正直な現状です。うちの社員でも何人か移住組がいるんですけど、東京から移住してきた人は夢とロマンを持っているので多少寒くてもきつい仕事でも頑張れるんですね。ところが今のご時世でネットから学ぶことも若い人は多くて、土日は休みがいいとか、有給が欲しいだとかが多くて、私たち零細企業から言わせていただくと道から人材育成の方にお金を付けてもらいたいです。うちの工場は働いている人の平均年齢が65歳位だと思います。上は77歳くらいの方もいらっしゃいますので、私が一番若いくらいになりますので、そこが切実な悩みごとの一つです。

小林：

佐々木先生は、先ほどの資料ですと連携自治体内での就職率が26年度50%で目標が60%と学校で出ているんですけども、就職の現実、学生さんが地域に残りたいといったときにミスマッチを感じるとかそういったことはありますか。

佐々木：

うちの学生の絶対数は多くないので、しかも今の状況の中では実は求人の方がはるかに多くて、そういう意味では学生は恵まれているんですね。私たちが一番大切にしてきたことはICTの技術でして、従来は東京等のIT関係の企業に就職する学生を育てることを目標にしている時期があったんですね。それは一つの大学の在り方ではあるけれども、それだと東

京の方から学生が入ってきて東京にまた戻って行ってしまう。4年間ここにいるだけなんです。それも学ぶ場を提供することではあるけれども、一番大切なことは今の社会で農業であれ水産業であれ完全に IT 化しているわけなんです。そういう一次産業なり観光なり教育の面でも ICT の技術は基本になっているわけです。その地域の一次産業なりなんなりを支えることができる人材を育てていくということが一番の目標だったんですけども、今はそういうことで実は地域の農協さんとかからもネットワークをきちんとやりたいということで、そういう形での仕事はいくらでもあるんですね。今はうちの学生はそういうところが就職の中心になってますけれども、地元の学生が大学に入ってその学生が地域の一次産業や二次産業を支えていく、その時に僕たちが今できることは外から入ってくる人たち、社会人の人たちがこちらの方に来て、この稚内の地で、テレワークだとか何とか言い方をしましたが、敢えて東京にいる必要はない。仕事はこちらの方でいくらでもできるということなんです。それはまだ自治体の方で準備ができていないので私たちの大学は去年から始めたんですけども、人材育成塾という形でこれからずっとやっていくつもりなんですけれども、東京で IT 技術を持った人たちがこちらで自分たちの仕事を興して、それをぜひここでやっていきたい。教育としてはそういうことをしていきたいし、稚内だけでなく宗谷管内のいろんな自治体の人たちにも応援してもらってここで働く、そういう場を作っていく。去年そういう塾をしたところ飛行機代等も全部自分でお金をだして 1 週間の勉強をしました。それが今年すぐに就職に就いたわけではないんですけども、東京にたくさんいますけれども。そういう人たちが稚内に来て、稚内は本当に可能性がある、風力資源ももちろんそうなんです。実はデータセンターのことも考えていまして、こちらのエネルギーを使って、しかも東京に管理されるデータセンターではなくて、稚内で必要とされるデータセンターをきちんと作っていく。そういうことができる人材を育成していく。それはできるだろうと思います。そういう雇用の場をどんどん作っていくというのはすぐにはできませんけれども、教育なので長い目で見ていかなければいけないんですけども、やっていきたいと思っています。

小林：

堂脇様は旭川から湯治目的でしたが移住ということは働き場所や子供の教育の場を考えると不安はかなりあったと思うんですけども、それでも来られた。また来た後に、地域の支援も結構あったということで安心だということもあったのですけれども、実際に移住してみて現実にどんな壁があり、どうやって乗り越えたかということ、もしあったら教えていただければと思います。

堂脇：

旭川から引っ越しして来る時の状態というのは前身炎症状態なので何度もここに来て住む場所を探すというのはできないわけですよ。自分で車も運転できない状態だったので。

その時に一番最初にしたことは、豊富町長さんにお手紙を書きました。どうしてかというとう不動産屋さんにも無いんですよ。住処を探す手立てがないんですよ。今はいろんな新しい人がたくさん入ってきて町の方でもそういった人はこちらに掛けてくださいと電話番号が用意されましたけれども、当時はそういうものも特になくてどうしたらいいかわからなくてお手紙を書いて役場から連絡をいただきました。それでも町営住宅に入るためには、よそ者が入ってこれるような条件ではなかったのでもまずだめですし、民間は斡旋になるから紹介できないと言われたので自分でインターネットで探して一度見に来て決めました。選択肢がないですから。ただそれは私が旭川だったからできたことで、本州から入ってくる人は一度も見ることができないので、今の状態だといきなり引っ越すということは無理だと思います。そんなときに、うちには今4人の人がいますけれども、まず第一歩、光熱費込みで3万円くらいで部屋があって、生活のベースが作れている中でいろんな人とコミュニケーションを取って住むところを探す、仕事を探すという現実があります。先ほどの働き方のことで、豊富町は秋になると酪農家さんの仕事は人手不足でたくさんあるんですけど、やっぱりアレルギーの人も多いですし、汗をかいてするというのは、炎症状態でできる仕事ではないですよ。よくなって元気になって実際にそれで勤めている方もいるんですけども。あったらいいねというのは、コールセンターとか大きな会社の工場とかある程度時間もきちきちじゃない中で、自分の体の健康も維持できながら勤めるところがあったらいいなという話がよく出てきます。あともともと地元で起業していて、経営も成り立っているんだけど健康を維持した状態で仕事がしたいということで、例えば広島から来たWebデザイナーの人は元々の顧客もいますけれども、豊富町内だけでなくすそ野を広げてお仕事をされています。少し話はずれますが、私は今回移住者たちで立ち上げた温泉盛り上げ隊という活動をしているんですけども、湯治というのはお風呂に入って宿泊所に戻ってという単調な生活なので、何か心のゆとりとか交流とかの拠点が作りたくて一番声が多かったカフェを作ろうということで、本も置いたりして休める場所を作りましょうということでやっているんですけども、その時に建物を探したんですけども、豊富町に補助金で建てた大きな建物があったんですけども、それはそういう目的のために作ったんじゃないのということでは使えなかったんですね。いろんな尽力をいただいてスキー場のロッジを使わせてもらったんですけども。そういう目的で作ったんじゃないけれども、もうちょっとシステムがあって、こういうものに使いたいんだという時に使える環境があったらいいと思うし、新しい建物を建てるにはお金がかかるけれども、今あるものをリフォームして、こういうものがこの町にあったら使う人がいるのに、使えたらいいのになというのは日々感じています。

小林：

よく言われることなんです。少しずつ知恵を出して緩和とかする例も出て生きているので是非声をあげていただいて皆で知恵を出していくと少しずつ突破できるのかなと思います。吉川様にお伺いしたい点があるのですが、先ほどの物流でよく言われるのが、物を出す

のはいいが、フェリーとか、帰りに何もないと物流として維持が難しいと思うんですけども、サハリンから日本に来るものってあるんですかね。

吉川：

船の関係で、私の友達で鮭やホッケをやりたいという人がいるんですけども、向こうから冷凍のコンテナを積む時には、船が動いていれば冷えるんだけれども、停まったら冷えないうことがあってハード的に難しいんじゃないかということを使う人もいました。技術的なことは私はよくわからないんですけども、そういった問題が解決できれば向こうから持ってくるのはシジミとかあると思うんです。

小林：

水産物は北方領土のこともあるので怒られるかもしれないですけども、あるのかもしれないですね。豊富町さんはこれ以上人が来ると大変かもしれないですけど、ちょっと思ったのが、北方領土のところでも医療がまだ薄いのでお金をいくら払ってでも来たいという人がいるというのは聞いたことがあるので、交流が盛んになると豊富町に、アトピーの方がどれだけいるかわからないですけどロシアの方が来たり、そうするとまた交流が生まれるのかなと思いました。

吉川：

私は毎年2人くらいロシア人を入れてますよ。100%お金を持ってこいと言って。ほとんど札幌の医大と専門的なところですね。

小林：

中標津の町立病院も年間2人くらいビザなし交流でついでに来て、お金持ちはそこで人間ドックを受けていくそうです。向こうはないそうなので。そういう意外なところでも交流が生まれるのかなという感じがあります。田中さんの場合はピクルスをどんどん輸出して、でも足が早いからなかなか難しいのかもしれないですね。

田中：

実は物産展でサハリンに出したことがあって、長芋だけは向こうにないので、長芋のピクルスはちょっと売れました。魚が入っていると向こうには輸出できないので、ピクルスに限られてしまって、一番売りたいものを売れないというもどかしさがあります。

## 6. 閉会

小林：

お話足りない方、もう少し伺いたいこともあるんですけども、時間が限られていますのでこんな形になりますけれどもこれを機会に引き続きいろいろな場で意見交換をさせていただければと思いますのでまたお願いいたします。最後に今次長から一言お願いいたします。

今：

田中さんのシャリシャリのニシン漬けという言葉に子供のころを思い出して、凍ったニシン漬けをカリカリ食べたことを思い出しました。物流コストが高い話は今お話に出ておりましたけれども、如何にまとめて物を出すかということだと、稚内港周辺でどうやってメンバーを集めて、帰りにどうやって荷物を入れてくるかということも大事でもう少しそのあたり考えないといけないと思います。先ほど小池田さんにまとめていただいたような感じなんですけれども、実は国交省で今週月曜日に水素のプラットフォームを立ち上げまして今後の水素活用について議論を始めたところなんですけれども、小池田さんがおっしゃったように今までは化石エネルギーに海外に払っていたお金をなんとか自国内で使って、多少コストが上がることも中で金が回れば、地域の仕事とかですね、住む場所につながってくると思っております、先週網走でこの会議をした時ですね、流氷の話がありました。流氷は30年前は網走の人にとって邪魔なものでしかなかったと。それが30年くらい前から何とかこれを活用できないかということでガリンコ号とかを含めて冬場に海外から多くのお客さんが来るようになった。見方を変えればということ先週聞いたばかりで、今日は先ほどの風力ですね、稚内は風が強くて大変だということも今では財源になっている。見方を変えた結果、地域の資源をうまく使う、地域の生産性を上げる、経済性の話につながればと思っております。短い時間で大変恐縮ではありますが、今日もたくさんの有益なお話をお聞かせいただきまして本当にありがとうございました。今日いただいたお話を今後の計画づくりに生かしたいと思っておりますので、また何かありましたらお知らせいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。

以上